

令和六年度

社会を明るくする運動

社会を明るくする運動とは、すべての国民が、犯罪や非行の防止と立ち直りについて理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、明るい地域社会を築くための全国的な運動です。この運動に対する理解を深めることを目的とし、日常の家庭生活や学校生活の中で体験したことをもとに、犯罪や非行に関して考えたことや感じたことを表現する作文コンテストで宍粟市の最優秀賞に選ばれた、六年生の作文を紹介します。

犯罪者って本当に悪い人？怖い？

六年

みなさんは「犯罪」と聞くと、どのような印象を持ちますか？私は「悪いこと。許されないこと。」とっていました。そして犯罪者と呼ばれる人のことは、「すごく悪い人。怖い人。あまり近寄ってはいけない人。」とっていました。

でもある日、私はこんな新聞の記事を見ました。せつとうをした人が、せつとうをした理由を語っていました。それは親が自分をなぐってきて、それが毎日続いているやになって犯罪に手を染めたというのです。私はこの記事を読んでしよげきを受け

ました。犯罪者は「すごく悪い人」だと思っていなかったからです。この人の話の場合、親が「すごく悪い人」です。犯罪は決して許されることではありません。でもその人はさみしかったらうな、独りて怖かったらうな、きっと犯罪をすることで親が自分を心配してくれるかもしれないと思っやってしまったのだと思います。

私はこのことを知って、その人が犯罪者でも、「すごく悪い人。怖い人。あまり近寄ってはいけない人。」とは思えなくなりしました。この作文を書く前に、他の人が書いた社会を明るくするための作文を読みました。その中には、「初めから犯罪をしようとする人はいない」と書いてある作文や、『暴力をふるっている子は本当は、みんなにかまってもらいたいから』と書いてある作文もありました。それらを読んでいると私の中に、「犯罪者って本当に悪い人なのか。いろいろな理由があつたまま犯罪に手を染めてしまっただけじゃないのかな。犯罪は許されないけど、本当は悪い人ではないのかもしれない。」という気持ちがだん

だんと芽ばえてきました。犯罪をしてしまった人の中には、悲しみやかまってもらいたという気持ちが原因だった人多くいるのではないかと思います。犯罪者の人のそういった悲しい話を知れば知るほどこの気持ちちは強まってきて、やがて元々あった「すごく悪い人。怖い人。あまり近寄ってはいけない人。」といった、私の犯罪者と呼ばれる人たちへの気持ちがうすまってきました。そして「犯罪を減らしたい」という気持ちに変わっていきました。

しかし、子どもの私に何ができるのでしようか。今の私にできそうなことを考えてみました。考えてみた結果、元気なあいさつや楽しい会話をするのが大切なのかなと思いました。私は落ち込んでいる時は、なぐさめてもらうよりも、「元気いっばいあいさつ」や「楽しい会話」の方がうれしいです。体についた傷は治すことはできません。体についた傷は、心にできた傷は「元気かもしれないけど、心にできた傷は「元気いっばいあいさつ」や「楽しい会話」でいやすことはできると思っています。これが今の私にできる最大限のことです。私一人では、小さな力かもしれないけど、小さなことで

も続けていくことで、犯罪をしてしまいうな人の心を変えることができるかもしれない。そのことで犯罪もなくなっていくのではないかと信じます。

犯罪はもちろんだめなことですが、犯罪者の方にも悲しい過去や理由があることを知りました。私は犯罪者を「すごく悪い人。怖い人。あまり近寄ってはいけない人。」と決めつけるべきではないと思いました。私は自分ができることをして、少しでも明るい社会にできたらいいと思います。

